

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授受承認雜誌第三五二號
昭和二十五年四月廿五日印刷 昭和二十五年五月五日發行

第十六卷

第五號

浄土

五月號

落花譜

吉田絃二郎

歩き念佛

村田嘉久子

道を求める心

藤井實應

廻向する心

服部英淳

1950

5

しま 一歩

世に「岡目八目」という。名人位の争奪戦もその棋符になつてあらわれたところをみれば、なんだこうすればいいじやないかとも思われる。ことに信仰とか念佛とかいうことは、決して岡目八目では分らない。夫子自身そうであるから、もう一息というところで、人の心にピンとくるようなものを書くことが出来ない。

むづかしくいえば、ものを客観化して考えるから、平たくいえば、他人ごととみるからである。自分が本當に駒を握つて盤に向えば、どうのこうのとは云つていられない筈である。

悟りとか、安心とかということとは、すべてのことを自分の身に引き及ぼし、その中にわれとわが心魂を没入させて、まざまざと憂い悩み、且つ泰然たり得る境地をいうのである。佛が無量壽無量光なのも、そのためである。

ものを書く場合にも、紙をのべ、書いたり消したりしているうちは未だ他人ごとである。自ら宗祖の常行念佛三昧の位を得たらんには、書く文字そのままが念佛となり、言う言葉そのままが信仰を語るはづである。私は老師遺愛の木魚を叩いて、朝一時間の勤行をつとめるようになった。始めて、自信を以つて人に念佛の功德を説き得るようになった。本誌はすべからず、われと思わん人々の、黙すに黙し得ぬ眞實の叫びを以つて、全紙を埋めつくすべきである。(竹中信常)

目次

道を求める心	藤井實應(7)
紫の車	阿川貫達(4)
念佛三昧	松濤誠廉(12)
ヒカリ佛	藤田寛雅(24)
落花譜	吉田絃二郎(3)
歩き念佛	村田嘉久子(16)
こゝが極樂	中野尅子(12)
花の寺	竹原竹堂(19)
五月の常識	(12)
日常勤行講話(五)	服部英淳(20)
芝園だより	



落花譜

吉田 絃二郎

俳人芭蕉は元禄元年の秋、名古屋から木曾を過ぎて、更科の里姨捨山の月をながめることにした。門弟の越人が同行することになったが「木曾路は山深く道さかしく旅ねの力も心もとなし」といふわけで、これも門弟の一人である荷兮が自分の召し使ひの男を付き添ひにして送らせた。

或る山路で六十ばかりの道心の僧がやつて來た。顔を見ると面白くも可笑しくもないと云つた風のたゞむつとした老人で、腰が曲るほど荷物を負ひ、息をはづませ、足をきさむやうにして歩いてゐるのであつた。それを見た越人が、あはれに思ひ、馬をやとて、芭蕉たちの荷といつしよにその老人の荷も馬につけてやり、芭蕉を荷とともに馬の背に乗せた。

馬に乗せられた芭蕉は「高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大川ながれ、岸下千尋のおもひをなし

尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず」といふわけで、しばしも心休らふひまとでもない。徒歩で歩いてゐる者さへも、眼がくらみ、魂もちゞまる思ひであつた。

ところが、荷兮が附けてくれた召し使の男を見ると、かの男は馬上に居眠りをしてゐる。「馬の上にてたゞねぶりに眠りて落ぬべきことあまたゝびなりけるを跡より見あげて危きことかぎりなし」と芭蕉は書いてゐる。たゞこれだけの感じならば誰れにも抱かれることであるが、さすがは芭蕉である。さらに次ぎのやうな感慨を述べてゐる。

その男の馬上の姿を眺めてゐると「佛の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがしさも我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり云々」

芭蕉の「更科紀行」を読むごとに惹きつけられる言葉である。

わたくしどもは無常迅速といふことは知つてゐる。しかし實際には馬上に居眠りをしてゐるかの召し使の男とちがはぬやうな生き方をつゞけてゐる。

芭蕉にしても無常迅速の悟りに徹したのは佛頂禪師に参禪して後のことである。それまでは或る時は名利にも迷ひ、仕官懸命の地をうらやみもしたのであつた。

しかし悟つたから、その人がにはかに尊くなり、悟らないからその人が卑しいといふことはない。生けるものはそのまゝにしてすべて尊い。悟るのも機縁であり、悟らぬのも機縁である。

今は花のさかりである。庭の櫻を見てゐると、散つて行く花もあり、梢に残つてゐる花もある。池の水に落ちて行く花もあり、黒い土の上に落ちて行く花もある。しかも枝に残る花は嬉々として春の光りを浴びてゐるかと思へば、散つて行く花も怡然として春の日を浴びて行く。留まるも悟り、散るも亦悟る。

多年負屋一蝸牛 化做蛞蝓得自由

火宅最惶涎沫盡 偶尋法雨入林丘

元禄元年の秋二十七歳にして家を捨てた俳人丈艸の遁世の偈である。

花の散る日獨坐して味ふべき言葉である。蝸牛屋を負

ふゆゑに自らを縛する。屋を捨て、蛞蝓に做ふ時はじめで解放せらるゝ。

丈艸は屋州犬山の人である。その出家の原因については、異母弟に家督を繼がせたい一念から、武士を捨てるために指を切り、墨染の衣を着たのだといはれてゐるが若いころから、病弱であり、人一倍早く、火宅一睡の夢の理を悟つたものであらう。

身をかくす浮世の外はなけれども

のがれしものは心なりけり

といふ丈艸の歌から考へて見てもかれが本質的に法雨を尋ねて山に入る人であつたことが想像される。

今日は降誕會である。うすら寒く、火鉢でも欲しいやうである。朝から庭の簾に來てしきりに鶯が鳴いてゐる。

このころはクリスマスが日本のお祭のやうにさわがれてゐて、釋尊の降誕會は忘れられてゐるやうである。輕薄な日本民族の一面がうかがはれるやうで、まことに、にがにがしい思ひがする。

しかし、降誕會はそれでいゝのである。そこに釋尊の釋尊たるまことの面目がある。

わたくしたちは子供のころ、昔、城であつたらしい高い石垣の上の禪寺に百數十段の石磴を昇つて甘茶をもらひに行つた。

花に飾られた花御堂の眞んかに立つてをられる可憐な誕生佛は少年たちにつけて夢の國の存在であつた。

わたくしたちは母親から貰つた一錢銅貨をお賽錢箱に入れた。青い竹で作られた眞新らしい柄杓で甘茶がお釋迦さまの頭からそゝがれた。やがてその甘茶がわたくしたちの竹筒に入れられるのであつた。

わたくしたちは甘茶をいたゞいて山門を出ると、指先で甘茶を額につけた。頭痛のまじないである。腹痛のまじないだといつて、腹をひろげて甘茶を臍のまはりにつける者もあつた。みんながどつと笑つた。

子供たちは青い竹筒をめいめいに抱へて山門前の高い幾曲りの石磴を走り下つた。山上の寺を下ると、そこには一面の茶畑があり、山鳩が鳴いてゐた。水車小屋があり、美しい川が流れてゐた。或る年の降誕會に、甘茶の竹筒を岸の青草の中に置いて、流れの中に飛び込んでみんなで泳いだことがあつた。

子供のころの山寺の降誕會は、今もなほわたくしの胸に靜かな尊いものを刻みつけてゐる。

山鳩の鳴いてゐた山寺、薊花や菜の花や椿の花で飾られた小ひさな花御堂は、都會の眞ん中で行はれる花祭りに幾倍したなつかしさを感じさせる。

敗戦以後わたくしたちはともすれば自分自身を過小に見積ることに馴らされて來た。かつての軍閥者のやうに

過大狂信するのは愚かなことであるが、二千幾百年の幽玄な傳統を持ちよさを持つ日本的なものを忘れてはならない。

國を愛するといふことは結局、その民俗のよさを知りよさを生かして行くことでなければならぬ。

伊豆の山には啄木鳥が多く、ともすれば山寺の檐から柱までも啄木鳥に啄かれてゐた。わたくしは灌佛會の前日、その山寺を訪うたことがあつた。そしてたまたま南の縁端に坐つて黙々して花御堂をこしらえてゐる老僧を見た。その姿はそのまゝ寂光につゝまれた繪であつた。

墨染の衣とくさぐさの花に飾られたさゝやかな御堂とを一つに結びつけたゞけで、東洋的な幽玄さは漂うて來る。

ミケランゼロの傑作に飾られたシステム禮拜堂の莊嚴はともかくそれにも劣らぬよさと幽寂さとを伊豆の山寺に見出した。

縷々として昇るたゞ一柱の香煙に幽玄の妙境を觀ずるのも東洋のよさである。

利休その他の人たちが只一個の土塊に過ぎない肩衝や茶碗に魂を打ち込んでその裡から幽玄の美を直觀したことを考へたゞけでも、この民族のよさが感じられる。

わたくしは物的には貧しいしかも精神的には豊かな佛敎國日本の姿を尊く思ふ。

現代妙好人伝二

紫の車

阿川貫達

私の友人水谷宣明師は學生時代より謀略のない、ありのままの人で妙好人であつた。宗教大學卒業後横須賀の走水覺榮寺に住職し、土地の走水小學校に教鞭を取り、昭和十七年まで廿三年間勤続、學童及び父兄の敬愛を受けた。又大正十年一月より覺榮寺子供會を開催し以後十七ヶ年繼續して兒童の思想善導宗教情操の涵養に資した。さればこそ一昨年發病以來各年度同窓生の見舞陸續踵を接して絶えなかつた。昭和十一年師父水谷宣隆師が遷化の後を襲つて横濱市戸塚區上倉田藏田寺に住職、爾來淨土宗宗會議員戸塚佛教會長町會長等を勤め衆望を擔つて居られた。

然るに私は突如全く晴天の霹靂の如く師遷化の報を受けた。急ぎ弔問し法嗣英雄君夫妻より交々次の話を承り心より隨喜低頭したのである。

英雄君は語る、父は平生胃病に悩んで居たが、勝氣で且つ一本氣な性質のためか、強い精神力をもつて、日々に蝕み衰えゆく肉體を

無理に克服しようと努め、時にはその心と肉との争に周圍の者の眼をそむけさせる程であつた。病に就いては父は再起を期し、心力を傾けて闘病生活を續けて居られた。私はつくづく人間の精神力の偉大なることを見味つた。けれども哀しい事には遂に闘病生活に終りをつげる時がきた。

昭和廿三年九月十六日、此日は早朝より猛烈な暴風雨が吹き荒んで居た。前夜まで寺務上の事を尋ねたりして何の異狀もなかつた父は、十一時頃より病狀激變した。時々心なき人形のようにボカッと虚な眼を開いては天井の一點を見つめ、暫くすると又うつろな目で風にゆらぐ窓外の木末などを見つめて居た。暑さと長病ひに體のダルサを覚えるので一同代るくさすつた。二三日前よりシヤツクリが出始め一層の苦しみであつた。そしてけわしい顔をして虚な目は何處か一點を見つめて居た。どうしても、たゞならない容態であつた。

病態急變と感ぜられたのですぐさま醫師を招いた。危篤状態が報ぜられ血縁者に打電した。かくて十八日は少康を得たもののようであつた。十九日は兩三日中最も平靜で只シャツクリが出るだけで気分爽快のようである。朝新聞を見、又うまそうに喫煙した。周囲の人々もホットした氣持であつた。私は思い當る事があつたので父に「髭を剃りましょうか」と云うと、ウンと氣輕に同意したのでなるべく靜かに手早く剃り終えた。父は氣持よげに睡りに入つた。

翌廿日朝六時頃であつたか病狀平靜、此分ならば二三日は大丈夫と、親戚の人達も歸宅の暇乞をすると、父は禮言を述べもう歸るのかと言いつゝ實に淋しげな面もちで目送した。ところがその直後の事である。午前七時頃容態急變した。そしてかすかに數珠をと言ふ。私は胸さわぎを押えつゝ父の合掌の手に數珠をかけた。すると紫の車がきた。車にのりたいが腰がいたくて乗れない。さすつてくれと言ひあとはたゞ口のみ動いて居る。恐らく彼岸より彌陀が寶車を隨え來迎し給うたのであらう。そしてその有り難さに恍惚歡喜の境地に入り專心稱名念佛したのであらうが、口が動くだけで私どもには聲としては聞きとれない。此の時は正氣なのである。心は少しも常と變る所がない。

それから暫くの後大好物の煙草をせめて最後の一服と思ひ口にくわえさせてあげた。何か言うようであるが聲が出ない。耳も聞えないようである。かくて午後三時頃全く意識感覺が不明になり、面貌

が變つた。今迄衰弱の極角張つた顔は圓味を帶びてふくよかな圓滿な相好となつてきた。そして時折微笑さえ浮べて居るではありませんか。

私はしみじみと父の面をながめた。そこにはあれほどに痛みと苦しみに悩んだ悲痛な感じは微塵もなく、恰も遊び疲れた小兒が忽ち抱き上げられた母親の膝の上に、すや／＼と寝入つて居る如くに、純眞無垢で何等の苦痛欲望喜怒哀樂など一切の穢濁邪惡な心なく、まことに慈悲圓滿の相好、大慈大悲の彌陀如來の如き御面相をたゝえて居る。それは普通の人間ではない。人間性をば超越せる眞實の存在であると思つた。私は合掌せざるを得なかつた。かくして周囲の人々が靜かに稱える念佛の裡に、正念にして禪定に入るが如くに五十五年の多難な人生を終つたのである。

そして英雄君は言う。私は今度と云う今度阿彌陀様の有り難さ、極樂の尊き存在を感得させていたゞき、洵にありがたい事でしたとつく／＼感じ入つて居られた。

私は水谷師は臨終に、いろ／＼の疑問を持つて居られたであらう法闡英雄君に、阿彌陀如來様の有り難さ、極樂の尊さを身を以て教えられたので所謂身業説法を垂れたのだと感悅徹徹措く所を知らない。私はその時「紫の車」が來たと言われましたかと反問した。紫雲の瑞ありとはよく言われる事だが紫の雲ではないのか、とにかく稀有な尊い事であると申した。

その後昨年の九月に私の寺に彼岸詣でに來た親戚の婦人に水谷師の「紫の車」のお迎えの話をした。すると即座にそれは「紫の車」がお迎えに來るのです。私の親戚に眞宗信者で福井縣太田郡上志比村淺見の河原吉左衛門氏の夫人ふくさん六十四歳が、大正五(六)年十一月廿四日病死した時、正氣で今紫の車が御迎えに來た、乗せて呉れ〜とせがんで止まず、是を見る事の出來ない親族の人々は止むを得ず、ふくさんを布團に坐らせて室中を擔ぎ歩いて望みに應じたと云う事であつた。蓋し來迎と云う事は曾て見聞した事が幻覺となつて臨終に現われて來るものと解釋する人もある。私はそうは思わない。紫雲の瑞はよく承る所であるが紫の車は寂聞であつた。水谷師はどうであらうか、知る由もないが「夢にでも曾て見聞したよ」と教えていたゞければなど思う。

少しく往生傳を調べて見た。中國で往生傳と云う書名ではないが早くも唐の迦才の淨土論下に道俗廿名の往生人を傳えて居る。その中に方啓法の傳中に、夢に法藏と云える一僧が一大事を御し迎えて車に乗せ西に向つて去ると夢みたとある。(但し此人未だ死せずと淨土論に云う)又淨土論下に信者の一老翁臨終に光明屋內を周照する老翁は西に向い物に登らんと欲するに似たりとある。物に登らんと欲したその物は車を指すか、蓮台を意味するか明かでない。

又淨土往生傳下に釋僧街傳の中に、啓芳・圓果の二法師が老を以ての故に僧街を敬して居たが、その往生を目撃し觀音像前に懺悔し

後數月を経た一夕、觀念の中に忽ち覺めて極樂の莊嚴を見彌陀如來と問答せる中に、一僧が一の寶車を御してくだり來り啓芳等に言うには、吾は法藏なり夙願の因を以ての故に來つて汝を迎うと、啓芳等車に乗つて前に進み又其身は寶蓮華に坐すと覺ゆ等とある。

日本往生極樂記の大日寺僧廣道の傳中に、寺邊の一貧女に兩兒があつた。天台僧となり禪靜延叙と云つた。母早世、乃ち二僧一心に法華經を讀み、夜阿彌陀佛を念じ偏に慈母の極樂往生を祈つた。廣道夢に空中に音樂を聞き驚いて其の方を見ると、寶車あり數千の僧侶が香爐を捧げて寶車を取り圍み、直に亡女の家に至り女に天衣を着せて車に載せ還ろうとし、二僧に告げて言うには、汝母のために懇志ありそれ故來迎するのであると云うたとある。

是等は寶車のお迎えをいたゞく例である。尙四五の往生傳を拜見して居る中に、臨終に空中に音樂を聞くこと、紫雲の瑞あること、光明に照されること、寶船のお迎えを感ずること、金の蓮台寶網を見ること、鸚鵡孔雀等の鳥が來集するのを見ること、等が來迎の瑞相にあげられて居るようである。

それはとにかくとして水谷師は今や極樂界で見佛聞法歡喜信受の法悦をほしいまゝにして居られるであらう。まことに尊い事である。

因に法名は演蓮社説譽上人法阿無礙宣明大和尚

道を求むるこゝろ

法然上人
法語私釋 (三)

——いかなる方法をもてか、わが心を守り信心をももよほすべきや——

藤 井 實 應

答ていはく、そのやう一つにあらず、あるいは人の苦にあふをみて、三途の苦をおもひやれあるひは人の死ぬるを見て無常のことはりをさとれ。あるひはつねに念佛してその心をはげませ。あるひはつねによき友にあひて心をはぢしめられよ。

人の心はおほく惡縁によりて惡しき心のをこるなり。されば惡縁をば去り、善縁にちかづけといへり。これらの方法ひとしなならず。時にしたがひてはからふべし。

(十二個條問答)

或る人が法然上人におたづねした。

「私のような愚かものは聖教もろくに見ませんし、惡縁のみ多くあります。どういふ方法をもつてしたらわが心をしつかりさせ、信心をもよほすことができませうか。」と、

上人はそれに對して實に懇切にお答へになつた。

「信心をもよほす道は一つではない、あるいは人が苦しみにあふのを見たら、ひとごとと思はず、三途——地獄、餓鬼、畜生——の苦をおもいやるがよい。あるいは人の死ぬのを見たら、それもひとごとと思はず、自分の身の上に省みて世の無常をさとりがよい、あるいは教の通り念佛を實際に申して心をはげますがよい、あるいは常に善い友に會うて自らを省み、至らぬ心を愧じるがよい、人の心といふものは多く惡縁によつて惡い心が起きるものである。それであるから惡縁を去つて善縁に近づけと古人も教えてゐる。これらの方法はきまつてゐるものではない。時にしたがつて、よきように、はからうがよい。」と。

法然上人のこの御懇切なみ教を拜讀して第一に注意せら

るゝは「信心をもよほすには」との言葉である。信心はもよほすもの、即ち内から湧いて出るものである。知識的に阿彌陀佛はいかなる方であるかを知つても、それは信心ではない、知識的に如何にくわしく阿彌陀佛を理解しても、それはわれわれを生かす力とはならない。信心はもよほすものであり、この身に即いたものである。それはわれわれの全生命によつて體得されるものでなければならぬ。それが爲には、この人生を眞實に生きぬかんとする心がなくてはならぬ。この心あるものにしてはじめて「人が苦しみにあふのを見一てもひとごとでなく、自らの問題として省みることになるのである、」人の死ぬるを見て「も自らの身の上に省みることゝなるのである。大切なのは眞に生きんとするの念願であり、自己内省であるといわねばならぬ。

「三途」とは三惡道ともいひ、地獄、餓鬼、畜生のことである。地獄とは迷ひ苦しみのドン底の世界である。逆惡邪見の心で世を毒害し、父を殺し母を殺すなどの大惡をつくるものゝうくる苦惱の世界である。餓鬼は不平不滿のたえない世界で、飲食物が眼前にありながらも、食ふことができず飢餓に悩む世界といわれている、畜生とは牛馬をはじめ虫けらに至るまでをふくめて畜生といつてゐる。これら三途を人間以外の世界とのみ考えず、これもわれ自らのうちに反省してみることが求道者の心がけである。人間でありながらその横暴なこと虎狼の如きあり、情慾の正しい

眼のない浮氣の鳥に類するもあり、正しき道理が分らず愚痴にして惡なること虫類に比すべきものもある。人間でありながら心意と行爲は畜生よりも劣れるものもある。或はあれもほしい。これも慾しいと常に不平不滿のたままない餓鬼のようになつてゐる者もあり、或は迷ひ煩ひ、罪に悩み苦しみ、日々がいやでたまらぬ地獄の如き生活をしてゐるものもある。これら地獄、餓鬼、畜生もまたひとごとゝ思はず、われ自らの内に三惡道のあることを省みるべきではないか、「人が苦しみにあふのを見」ては「三途」の苦を思ひ、自らの問題として省みるところがなければならぬと教えられたのである。眞に生きんとする願を強くもつ人ほど己自身を嚴正に反省するものである、己れ自らを嚴正に反省したとき、われ三途の部類に非ずと果していひうるであろうか、己を省みてその罪深きに氣づき、且は罪惡に勝たんとして常に罪惡を犯す無力なる自己に氣づく、かくの如くあつては、いつまでも苦惱の世界をのがれることのできぬ自分であるとなげかさるを得ぬことゝなる。かゝる無力の自己に氣づくとき、その我をなげだして救いを求めざるを得ない。こゝに他力の信ももよほされてくるのである。

次に「人の死ぬのを見て……世の無常をさとれ」と教えられた。諸行無常とは佛教の特に明にした眞理である。一切のものはうつりかわりて止ることはない、衰えたもの

が盛になり、赤ん坊が大きくなり、世の中が進歩發展するのにも諸行無常の相である。しかしながら諸行無常の教はたゞ客觀的な事實であるとみるだけでなく、己れ自身の主體的なことわりとしてこれをうけとらねばならぬ。それには諸行無常のことわりは、人生不如意の際、逆境におかれたとき、愛するものと分れねばならぬ場合等に、ひとしほ身にしみて味えるものである。殊に近親の人の突然の死にであうときなどに痛感せられるものである。そしてまた、生にてゐる間にあれもしたい、これもやらねばならぬといろ／＼計劃もし、準備を整えても、ひとたびこの死が訪れたならば萬事夢と消え去つてしまふ、死は一切を虚無の彼方きおしやつてしまふのである。しかもその死は一度は必ずやつてくる、そしてその死にどこでいつあうかも分らぬ。われわれはその死に對して如何なる覺悟をもつてゐるだらうか。

一死は夜が來、そして冬が來る以上にさけられない事實である、私達は夜に對し、冬に對して用意をし準備をするのに、どうして死に對して見ないようにするのであるか。」と、トルストイも言つてゐる。又「屢々死について考えよ、そしてまもなく死ななければならぬものゝように生きよ、いかなる行をしようかと、どれほど迷つた時でも夜には死ぬかも知れないのだと考へてみたら、その迷はすぐに解決される。そして義務とは何であるか、人間の願望はいかな

るものでなければならぬかということが、すぐ明らかになる一と。

淨土教の高祖、善導大師は『往生禮讚』の中に無常偈を述べて同行者をいましめられた。

晨朝無常偈

もろもろの人ら聽きたまえ、晨朝無常の偈を説かん。

とこしえのたのしみを求めんとおもはば

まさにひじりの法を學ぶべし

衣と食は身と命を支ふれば足る

そのよしあしはよのひとに得るにまかせん、もろもろの

人よ、今日この朝各々六念を誦したまえ、

(六念ニ念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天)

日中無常偈

人生けるととき精進なければ

たとえば樹の根なきがごとし

華をとりてひさかりにおかんに

よくいくばくの時か鮮かなるをえん

人の命もまたかくの如く

うつりかわりはたちまちの間なり

諸の道をおさむる人々にすゝむ

つとめおさめてすなはち眞に至りたまえ

日没無常偈

ひとびとあわたとしくもろもろのつとめをいとなみ

年と命のひるよるに去ることをさとらず

ともしびの風の中にきえんことはかりがたきがごとく

ゆくえしらぬまよいの道はさだめなし

いまだ解脱して苦しみの海を出づることを得ず

何ぞおろかにしておそれなきや

おのおの聞け強くすこやかに力ある時

みづからむちうちみづから勵まして常^{かほらざるもの} 住を求めたまえ

初夜無常偈

わづらいなやみは深くして底なく

まよいの海はほとりなし

苦しみをわたるの船は未だ立たず

何ぞこのんで眠りにふけらん

たけくいさましくはげみにつとめ

心をおさめて常にやすらいにありたまえ

これ等無常の偈^{うた}を拜讀しつゝ一人の死ぬを見て……世の

無常のことわりをさとれ一とのみ教をよくく味ふ時、そ

こから信はもよほされるであらう。

「或は教の通り念佛を實際に申して心をはげます」こと

は信をもよほす秘鍵である。教といふものは古聖の體驗の

あらわれである。古の聖賢が苦修練行の結果體得されたも

のを、或は身に、或は言葉に、或は意^{こころ}に示されたものが教

となつたのである、信仰は實に身に即いたもので、離れる

ことのできないものである。體驗に少しもふれないものに

とつては教といふものは實にわけの分らぬものゝように思はれもするであらうが、それはたゞ知識的にのみ理解しようとするからである。「如實修行」といわれてゐる如く、み教のまゝに行することによつて眞理を身につけることができその教がはじめて分るものである。されば教の通り念佛を實際に申して心を勵ますことが信心を催す大事な心がけであるとしされたのである。

その念佛を行するにもよき指導者をうるといふことが又大切であると思はれる。眞の善知識——即ち體驗の指導者をいたゞくことが大切である。善知識にあい、正法を聽くことのできることは、實に上なき幸といわねばならぬ。しかして善知識にあい、正法を聽くことはまたむづかしいことだともいわれてゐる。無量壽經には「若し人、善本がなければ正法にあふことができぬ。此世に於て正法を聽くことのできるのは、前々の世に諸佛にあらたてまつたからである。」一清淨にして道を求むるものゝみ、すなはち法を聽くことができる一とあり、又或經には善知識は是れさとるを得る道の大因縁である」と説かれ、「聖き法を修めて生き死にの煩ひなき安らけき涅槃の境地に至るを得るは善知識による」とも示されている。或る時佛陀釋尊の弟子阿難尊者が釋尊に向つて「善知識はさとり道の半の因縁であると思ひます」と申しあげると、釋尊は「そうではない、善知識はさとりを得る道の全因縁である」と教えられたと

のことである。たとひ過去に宿善があらうとも、善知識に値い奉らなかつたら、宿善開かれてみほとけの菩提に至ることはできないであらう。それ故に一正しき教を説く師があつたら、十里、二十里、百里はおろかたとい、四千里の遠きも、急に行つて教を受け、しかも其師を君の如く、佛の如く敬つて身肉手足をも供養すべきである。』『般舟三昧經』と教えられている。善知識はわれわれの佛性を開發するように導いて下さる、それはちようど、眞赤に燃えてゐる炭火のそばえ、つめたいまつくろな炭をつけてをけば、自然に火がもえうつつてゆくように、信仰に燃えてゐる人に接する時は、いつとはなしに、否、時にはハツキリと其時が分るまでに信仰の火がもえうつつてくるのである。又善知識は常に慈悲の心をもつて導いて下さる。その慈悲の心と、求道者のまごゝろとが一つになつて信仰の火がもえうつるわけのものであらう。それゆゑ千里の道も遠しとせず、善知識について教をうけよと示されたものと思う。

そのほか一よき友にあいて自らを省み……惡縁を去つて善縁に近づけ一等、それぞれ時にしたがひよろしきに従うて眞劍に道を求むべきである。その道を求むる心、切なるところには、善き友が次々に與へられ、善縁にもめぐまれ眞の大善知識にもあらうことができるであらう。それはまたやがて阿彌陀佛のみ光を蒙り、み壽に生かされて、大歡喜を覺ゆる時が必ず來るに相違ない、大切なのはその道を求

むるまごゝろである。

法然上人は

かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をもおしみやはする

と熱烈な求道の心を示され、阿彌陀佛を慕ひたまふたのである。わが全生命を救いたまう阿彌陀佛にあいたてまつるには、全生命をなげだすだけの熱烈眞摯な求道の心がなくてはならぬ。

現代妙好人傳のために

この現代に尊い最後の姿を示してゆかれた往生者について、阿川貫達先生の「現代妙好人傳」はふかい反響を讀者の間におこしております。先生は現代の往生人傳を集録されるために多年力を注がれておりますが、こうした實話は近親の方々の心の中にふかく藏されてはいても、ひろく世間に知られることの少いために、その集録に先生は非常に御苦心をされております。

就ては會員の方々にて斯のような實際を、身近に見聞し或は傳聞されたことがございましたら、先生に直接（東京都港区赤坂一木町）または本誌編集部宛にお知らせ下さい。詳しくなくとも要記で結構です。正しい信仰をひろく傳えるためにお願します。



コ　コ　が　極　樂！

中　野　尅　子

□「極樂デありますか」

○「有ります」

□「ドコにありますか」

○「ココにあります」

□「ココとはドコですか」

○「此處です」

□「此處ですか——？」

○「そうです、此處です！」

□「こんな處ですか——理窟でしょう」

○「いや、理窟ぢやありません。あなたの方が理窟ッぽい。こんな處は極樂でない、ココは娑婆だ。極樂はズーと向うで、もつといい處だ、此處は浮世で、悪い事をやり度い放たの處だときめて被居る。私は眞剣ですよ、眞面目に本當に、此處は極樂だと思つています」

□「本當ですか、こんな穢い家が、此んな苦勞の多い貧乏暮らしが極樂ですか。あんたなんか極樂でしょうが、私なんかとても極樂と思えませぬ……」

○「いや、此の穢い家ほど泌々有難いなアと思えます。貧乏暮らしだから一層つくづく、こ

念佛三昧

松　濤　誠　廉

淨土宗の根本はと云へば念佛三昧の他にな
い。これには二つの形式があつて、一つは生
活しながらの念佛で、他は生活を退いての念
佛である。前者は佛國土を淨め、後者は自己
を往生菩提に淨める、従つて吾らはこの兩方
を完全に行ふことを考へねばならない。一般
の見方で生活のある事に失敗したとしても、
純眞な念佛の中にその事を遂行したのである
なら、念佛の行者としては完全である。解脱
の絶對は成否の兩者を充し貫くからである。
この生活の念佛三昧を行ふためには、往生意
志と後の生活を退いての念佛によつて得られ
る念佛三昧性が必要である。往生意志を得ん
とするものは本宗僧侶と經典に求むべきであ
る。本宗僧侶は求めるものの知識に順して興
へて呉れるであらう。退いての念佛三昧を得
んとするものは、靜かな處、一人の寢た夜で
もよいし、車中の如く一定の音が他を壓し得

んな貧乏暮しでもよくも七人も暮らさして貰えることだと、私は口癖のように家の者にも申します。私の家は味噌汁と煮干で育つたなアと申しますが、これだけは三十年來絶やした事がない。長男が二十七歳になるまで九人家内が一度も入院した事がない、入院する金も有つた事が無いから、そんな事を考えた事もない。それを風邪を引いてもソレ入院百日咳きだからソレ入院と心配していられるお家と較べたら、まだ私の家の方が餘程仕合せだと思つてゐるほどです。新しい住宅の設計圖を見ると、必ず四疊半でも子供部屋と云うのがあるが、子が六人も七人も出来たら、あんな部屋でどうするのだろうか。なアといつも考えさせられる事です。恥かしい事には、私の家では一番初めに二尺に足らぬ小さな机を一つ長男に買つてやつた丈で、其後は二圓五十錢で買つた足の引伸ばし出来る飯臺を、御飯をたべると後で持つて行つて机にするだけで、机と云う物を買つてやつた事が無い。その内に、皆子供が育つて仕舞つて、今、大學へ行つてゐる三男でさえ、自分で机を造つて、自分で本箱も造つて勉強している。いつも机だとか本箱だとか云つた事が無いから、忘れてゐる内に皆修學時代が済んで仕舞つたのです。本當に親として申解ない事だつたなアと、二十年ばかり経つてから氣がついたのです。一つ電燈で親も子も幾つか頭を寄せて、勉強や仕事をやつて來たのです。私一家の貧乏や慘さに較べたら、アナタの家なンか餘り立派すぎるから「こんな穢い家でー こんな貧乏暮しで？」と被仰るのです。本當の感謝は貧乏や苦勞のドン底ほど感じ、本當の悦びは不幸や困難の中ほど感ぜられます。贅澤や輕薄な浮はつた生活では、却つて感謝や歡喜がわからず、不足や不満や不平が多い。極樂の中に居る人ほど極樂がわからず。地獄に落ちた時ほどハツと氣が附いて極樂がわかるのです。皆、多くの人は『極樂地獄』に居るのですネ」

るところでもよい——を求めて光明救済を信じ、て口稱念佛すべきである。その口稱はその靜けさを變ずる恐れのない限りに於て、高聲でも外に出ざる聲でもよい、若し所謂三昧に入る事が出来なければ、この世の苦を反省し、往生意志を盛にすべきである。彌陀を信じ、光明救済を思いかへすべきである。この彌陀と光明の現代的説明は本宗の僧侶に聞け。

五月の常識

憲法記念日(三日)「國家再建の基礎を、人類普遍の原理に求め、自由に表明された國民の總意によつて確定された」新憲法公布の日であることに違ひないが、國家再建といふ人類普遍の原理といつても、平常の生活、この日本の隅々の人の心にそれが、もつと平明に現われてくるのでなければ何にもならない。記念日だから何か行事をやる、講演會だやれ何とかだと、騒いでも始まらない。一體われわれは何のために、憲法を新しくしたのか、どうしてそうせねばならなかつたかは、

□「極樂地獄——と云うのはどう云う事ですか」

○「極樂の中に居つて極樂が見えず地獄をやつて居るのです。だから是れを知——愚痴と云うのです。眞知を失つて迷つて居る、惱んで居る。これに反して地獄の中に居り乍ら極樂！と氣がついたのが信心——眞信です。明知、良知です。智慧であつて愚痴でない、だから驕りや慾が無くなつて、南無阿彌陀佛——有難く、明るく強く暮らされる。生意氣な知識や理窟があるから、俺等がこんなに苦しむ不合理さは怪しからぬ、親が悪いのだ、社會が悪いのだ、政治が悪いのだ、宗教も悪い、俺の運命が悪いのと當り散らして益々わからなくなる。勿論、親も社會も政治も道德も宗教も皆悪いでしょう。悪いけれ共一番悪いのは、自分の自覺心の無いことだ、信仰心が發起して居らぬ事が一番悪い。信仰の心が醒めたら、其の悪い親も社會も……一切を直ちに良くして行く事が出来る。自分の運命、自分の幸福をも良くし、呪うことなく、怨む事なく、怒る事なく、他を怒る代りに自己を叱つて、他に盡すこと薄きを歎いて一層愛の人たらしめる。法然上人が土佐配流と聞いて「是れ朝恩なり」と感謝し、イエスが最後十字架上の苦しみの中からも「彼等は知らざればなり」と、自分を十字架に掛けた一切の民衆、社會を赦している。此等の事は何も法然上人やイエスのみが偉いのでない。日常茶飯時にも我等親たる者の中からは、現われづめに顯われている愛の斷片であります。此の大愛、大慈大悲というものが極樂です。如來の光明です。此の光明輝くところ一切を明るくし、温かくし、なごやかにする。極樂物語はウソでない現實に在ることあります。又、有らしめたい事、あらねばならぬ事であります。アナタは自分に無いからとて否定するだけでは、自己の否定であつて極樂の否定とはならぬ」

□「フム、そう云えば極樂と云うのは、自分の中から出て来るモノとでも被仰るのですか」

われわれ一人一人のどう生きるかの結局は問題なのである。この日一日だけ、新憲法をかついで民主主義になつたつもりで記念日にはしたくないし、とんでもないことだ。

こどもの日(五日) この日は「端午」の節句で、鯉のぼりが五月の青空に、勢よく泳ぐだろう。三月三日の雛の節句は民間行事にとり残されて、この日だけが國家的祝いになつたというのは議論もあるだろうが、まさか男の子供がそれだからといつて得意になるわけでもないから、一般ではやはり端午の節句で祝いの日を感じるにちがいない。たゞ法律では變に氣を迴したのか、「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」といつて、父親に感謝するのを省略したのはこつけないである。これは女の子の雛まつりを無視した埋め合せだそうで、父親には勤勞感謝の日の方で花を捧げようというのだらう。

それはともかく五月を昔からサツキと言うのは、早苗月の意味だと言う。早苗を植える

○「そうです。私の中からも出て來ます、アナタの中からも出て來ます、天地に充ちているものだから、一切の存在の中から現われ、既に一切の現象の上に現われているものがあります。例えば商賣で損しても、野球や碁や將棋の勝負で敗けても」仕舞つた！」と思う時、非を悟つてコレカラ旨くやらんならぬ——と瞬間、知見が開け、覺醒實行を誓う。此の反省、懺悔、創造、更生の瞬間こそは新生のクライマックスであります。舊態を破棄し、蟬脱して大飛躍を遂げる刹那であります。芭蕉が「蛙飛び込む水の音」を聴いたような『往生の一關』であります。舊き死によつて新しき生が始まつた眞實えの入門、入道の悟境であります。斯う云う悟境を次から次へと不斷に無限に貫いて躍進するところに、過去を欺いたり、愚痴ている暇がなくて、いつも希望に生き、新しき發見によつての感謝歡喜の外ありません。だから極樂、極樂、極樂……の存在で。

もの皆をたのしみて往く心あり、惱みのかげも消えうせてけり
と思はず口ずさんだ譯です。

だから此の創造の原理によつて極樂を造つて行く者でなくては本當の極樂の味はわかりませぬ。これを念佛生活と云うのです」

□「私達にも、そう云う心持なら多少はありますネ」

○「そうです。だから、ココが樂樂、ココにもあると申したのです。ココが極樂——賛成が出來ますか」

□「ハハ……、賛成します」

○「それぢや、アナタも念佛者です。極樂往生人です。手をつないで進みませう……」

月は一年の我々の食生活に大きな意義を占めている。祝日を休日とだけ考えないで、そのふかい意味を思つて自ら感謝と勤勞への心を新たにしたい。

—NHK—

眞野正順先生、四月八日花まつり「朝の訪問」でNHKから放送された先生のお話は佛教の將來についてつよい反響をひろくあたえられた。大正大學長として新學年の御多忙の中をお願いして近く本誌にも御執筆ただける豫定です。

佐藤賢順先生、五月の佛教放送を連續御擔當になりますため、今月は先生の「法語私釋」はお休みになりました。更に宗學大會準備のため、月初仙臺に赴かれる。

—廣告—

信仰心高く質朴な交通不便の地、寺院未亡人嗣子幼少、老僧高齢養子に行度、照會次第至急詳報します。兵庫多田局區内 杉山進順

歩　き　念　佛

村田嘉久子

腰の荷物

一昨年のも暮れも押詰つてから鎌倉へ引越し、又昨年のも師走の中頃生れた土地の品川へ移轉するまでの丸一年間に種々の事を經驗しました。鎌倉へ引越した初めの頃は物珍らしいのと暖かなのと空氣がよいので、非常に毎日が楽しかつたものでした。

拜借して居る別荘は大きくて靜かで、廊下から海が見えて夕方になると入り陽が海に映じてとても美しいので、見とれていつまでも眺めあかした事もありました。

鎌倉にいろいろ古い建物などを見てお置きなさいと、私の得度の師である佐藤賢順先生にお話したら、御親切に「鎌倉寺社めぐり」といふ御本を貸して下さいましたのに、申譯のない事に、初めこそ

今日は此お寺を拜見しよう、明日はあのお社へ參詣しようと思ひつゝ、何や彼やと毎日東京へ出る用事ばかり多くなつて來て、ほんの二三のお寺を拜見するに止まつてしまつてそれが今もつて心残りで心残りで仕様がありません。

毎日の東京通ひの電車の中、往復とも大概はつり皮の御厄介になつて東京へ來るのです、どうかした拍子に本當にどうかした拍子と言ひたい位たまの事です、わすかに腰を下す時があるとその時の嬉しさといふものはありませんでした。

そんな時何か立つてゐる人のために良い事をして上げたい氣持がしきりと致すのです。

一日一善と口では申しても實行はなか／＼むずかしいのですが、又、一善といふ程大した事でもないのですが、私は網棚のない車に乗つた時、もし座れたら、かならず人の荷物を持てるだけ持つて上げる事に心をきめたのでした。

網棚はあつてもそれが遠かつたり、持ち物が大切なものだつたりする時は、私自身矢張り自身で持つていたいものですが、東京までの約一時間の間はかなりの苦しみです。それを思つて荷物を持つて上げる事を心懸けました。

處で住ひの材木座から驛までのわずかな時間ながら、此バスの内で、随分澤山の荷物をお預りする事がありました。

五六人分を持つて上げると、自分の顔が荷物で隠れてしまつて頭がやつと出る位、そんな時眼鏡のつるがこわれさうでハラ／＼する事があるのですが、このためにどんなに人様が助かるかと思ふと自分だけが良い氣持なのでした。

處がさて、反對に自分が大きな荷物を持つてバスや電車に乗つていても、ちつともそれを預つて呉れる人がいない、一度など手がしびれてしまつてもう其處へ荷物を投出してしまおうかとさへ思う程の時でも、前に腰かけている人が新聞を読みながら平氣で知らん顔をしているやうな時があります。

そんな時、思はず恨めしくなるのです。あんなに此方が大勢の人の持つて上げるのに、自分の時はこんなにも助けて貰へないものかと恨めしくなつたりするのです。

一度などつく／＼馬鹿らしくなつて、なんで頼まれもしない事を只自分一人よがりで、もう止めようかと思ひながら、フツと車外へ眼をやると、丁度其時大船に電車が停車した時で、車窓からあの大きな觀音様が見えて、それを心持ち拜するやうな形で——いつも通る度にさうするのですが、——その時も觀音様を仰ぎながら、まだ／＼私の修行が足りないのだと考えました。

人を恨むより自分を恨めで、自分が至らぬ所をしみ／＼と考へた

ことでした。

歩 き 念 佛

其日は丁度東京の用事で歸りが遅くなつて十一時頃に鎌倉へ着いたのでバスは割に早く上つてしまいますので夜十一時ともなればあや筈はなく、材木座まで歩く覺悟はしていたのですが、そんなに遅くなつたのは初めてでした。私の他には人一人通らず、細いぬけ道はかへつて氣味が悪いので、遠廻りでも大通りを歩く事にきめて歩き出しました。

電車の中で男の人の話に、夜おそく歩いていたら向うから來た人とすれ違ひざまいきなり顔をなぐられた、とか喧嘩を吹かけられた／＼か聞いているので、私も一寸恐い氣持がしていました。

其時は他に人がいなかったのがかへつて安心を覺えて歩き出したのですが、晝間、荷物の事から觀音様の事に思ひ及んで、フとこんな淋しい恐い時はお念佛でも唱へて歩いて行つたら……と考えました。

勿論今までもどこでも御念佛を唱へる事はありましたが、其時は驛を出るなり、一步ごとに「南無阿彌陀佛」を唱へることにしたのです。右足で一廻、左足で一廻といふ工合になるので、自然唱へ方にも非常な力が入つて來て、傍に人が歩いていたら、左右の足の運びや身體の動き方が随分可笑しく思えた事でしよう。

暗い處など、私は眼が悪いので、さぐるやうにして唱えるのですが、そうすると不思議に恐さも道の長さも感じないのです。

そんな事を繰り返しているうちに一度など星あかりも届かない暗い處で、わずかに前方に光つた處があるので、てつきりあすことが水溜りだと早合點して、其處をヒョイト飛び越えたのですが、處が水溜りだつたのでろに水溜りの中にとび込んでしまつて下駄も足袋も泥水だらけ、光つて居た處の方がかへつてよい道で、逆に其先の方が水溜りだつた譯ですが、其晩家の門まで歸りつくまでに勘定したお念佛の数が千四百四十六遍でした。その數へ方というのは、次のようです。両手に荷物を持つていたので、最初の十念は先ず阿彌陀様のお顔を想像して白毫相からお眼お耳お鼻お口と十遍を、それを左手に百遍、右手に百遍といふ工合に指で數へていたのですがそれが家へ歸りつくまでに千四百四十六遍を唱へた事から、何か非常に楽しくなつてそれから夜遅くなつてバスの上つてしまつた時にはかならずこれを繰り返へしました。

其内に何百遍のお念佛の時があの大きな石のある處で、あのとび込んだ水溜りのある處は五百何十遍の所だといふ工合に、いくら暗くともいくら道がでこぼこしていても、決してつまずいたり水へとび込んだりしなくなりました。そればかりか、數で解つて居りますから、其處へ來ると、ピタリと足を止めて決してあふない處へは通らずに済みますし——、もつと有難度かつたのは、次のような経験

でした。

或る夜、或る男

或る夜どこかの横町からタッタ一人酔つばらいがフラ／＼と、私の後へ姿を現わしたのです。私は思わずハツとしたのでした。それはその酔ばらいが竹の棒を持つていて何かわめきながらすでに戸締りのしてある家々のその戸をビシャ／＼とこわれるやうに叩きながら歩いて來たからでした。

何か不機嫌の事でお酒でも飲んだか、人と喧嘩でもした後なのか其叩き方と言つたらどこの家でも戸を叩きこわされはしまいかと、ハラ／＼する様でした。

勿論どこでも寢靜まつていますから開ける譯はありませんが「起きろ起きろ」といふやうな事を言つてあつちこつちの家の戸を叩いて歩いて來るのです。

あの竹の棒でビシツと打たれたら私など顔が曲つてしまふ——と思うと流石に私もお念佛どころの騒ぎでなく、本來なら一層唱えろべきでしょうが私はまだ修行が足りなくて駄目だと後になつてしみじみ思つた事でした。どうしたらこの酔ばらいに私の姿を見せずによすまされるかとトツサに考へました。そのうちにも足音はどん／＼迫つて來ます。追ひぬきざまビシ／＼とやられそうに恐ろしくつて恐ろしくつて堪りません。

胸はドキ／＼するし、足が思わず早足になつて逃げるような形になるのですが、思ひなしか酔ばらいの方もそれを又追かけてでも來るように段々足が早くなつて來て戸を叩くビシーッ／＼の音も益々激しくなつて來たのです。もう駄目だと……觀念した時が丁度黒い板塀に巡ぐらされたお屋敷の前なのです。

自分でもどうしてそうやつたのか後で考へても分らないのですがトッサに其黒塀に家守のようにはりついてジッと息を殺していたのです。

いくら暗夜とはいえ、今まで眼の前に歩いてきた女が急に見えなくなつたのですから可笑しく思つたのでしよう、ビシーッ／＼と私の眼の前まで來て、あつちこつち覗くようにしてそこらを叩いているのです。塀の上から突き出た樹の枝や地面の石などをビシー／＼と叩きながら、キヨロ／＼見廻していたようでしたが、家へでも入つたか横町へでも曲つたかとも思つたものか、黒塀にはりついてゐる私の眼の前をスーと通り越して行つた時には思はず口の内に一念佛を一生懸命唱へました。やがて酔ばらいは思切つたものかどんど／＼先の方へビシー／＼とやりながら何かブツ／＼言いながら去つて行きました。

いつまでも私は其まゝでいました。又いつ引返して來るか分らないような氣がして、塀から身を離れた時はビッシヨリ汗をかいていましたが、何とはなしに此時ばかりはお念佛の功德のありがたさを

しみ／＼感じられたのです。

疑心暗鬼、酔ばらいは何もしなかつたかも知れませんが、又自分一人で恐れたのかも知れませんが、もし、私の考へたようにあの竹の棒が顔でも體へでも一ツ當つていたら、恐らく無事ではすまなかつたでしょうし、つかまつてしまつたら何を言出されたか知れませんでしたのに、見つからなかつたのは本當にみ佛の救いです。おかげで此夜は千四百四十六遍のお念佛も、何もめちや／＼でした。その代り歸宅後いつもよりはかなり長い時間、佛様にお禮の念佛を申上げました。

花の寺

土佐 竹原 竹堂

(本誌會友)

相向ふ本寺末寺の花吹雪
花吹雪く山門を出で檀用に
堂塔の万朶の櫻月を得し
簪ゆれ庭あますなき落花かな
花に棲み三十三世住持われ

勤	行
解	說

廻向する心

—第五講—

服部英淳

總廻向文

願以此功德 平等施一切

同發菩提心 往生安樂國(十念)

(願はくば此の功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心を發して、安樂國に往生せん)
念佛一會が終つて、光明遍照の照益文を読み、お十念を唱へると、次に廻向文を読む。

廻向文には總廻向と別廻向とがある。父母肉親などの忌日にあたつて、特別にその方々の戒名を読んで追善廻向するのが別廻向である。今こゝにかゝげた文は、特定の人でなく、廣く一切衆生に廻向するのであるから、總廻向といふのである。

總廻向文は、もと善導大師の觀經疏の初にある發願序の最後の偈文である。大師はこの書の述作に際して、先づ彌陀釋迦二佛の照覽を乞ひ、これから觀經の眞實の意味を明かにし、廣く淨土の門を開きたいと思ふが、この功德をあまねく一切衆生に施與して、皆共に

菩提を願ふ心をおこし、西方淨土に往生したいと願はれたのである。

この偈文を勤行に引用したのであるが、こゝでは、前から拜讀して來た香偈や三寶禮をはじめ、聖典お念佛などの善根功德を指して「此の功德を以て」といつたのである。

この中、お念佛の功德が最も勝れてゐることはいふまでもない。阿彌陀經に「少善根福德の因縁を以ては彼の國に生ずることを得べからず」と説かれ、法然上人は選擇集の中に、念佛は大善根、その他の善はすべて少善根であるといつてゐられるからである。この功德を「平等に一切に施す」のである。わけへだてなく一切衆生にふ

りむけるのである。

廻向といふ文字は、廻は廻轉であり、向は趣向である。佛教で説く自業自得の道理からいへば、自分の修した善根功德は、自分がその善き報ひを受けるのであるけれども、こゝでは、自分の積んだ善根を、すべてめぐらして、一切衆生にふりむけるのである。

そしてまた、廻向とは、言葉をかへていへば、自分の内容を充實させ生かすことである。自分の内容といふのは、一切衆生であり世の中である。一切衆生を生かし、世の中を生かして行く以外に、自分の生きる道がない理由があるからである。廻向とは、このやうなはたらきである。

中阿含多界經に「此れに因りて彼れ有り、此れ無くんば彼れなし此れ生ずれば彼れ生じ、此れ滅すれば彼れ滅す」と説かれてゐるが、萬有は一つとしてそれ自身獨立の存在はあり得ない。必ず因縁相依の關係に於て成立し、變化する。この縁起の法は、佛の證りの内容であり、佛教の根本原理である。佛教の人生觀も世界觀も、これを基調として展開する。この道理にくらく、この大道にそむく迷ひの心から、生死輪廻の苦しみが生ずる。

かへりみると、我々が日常經驗してゐる生活は「個我」を主張し、「我執」にみちた奪ひ合ひの生活であることに氣づかされる。「むさぼり」と「怒り」と「反省のない」生活である。そしてそれは地獄と餓鬼と畜生への道である。苦痛にひしがれ、争ひにつかれ、あさましい世界を形成する。そこには光りなき絶望と虚無の外なに物もない。

これに反して、與へ合ふ生活は希望と充實の生活である。しかも我々は、與へられることのあまりに多く、與へることのあまりに少いことに氣がつく。むしろ、我々の「すべて」が與へられたものであり、あらゆる「めぐみ」が、私をして今日あらしめてゐることを知るのである。まことにかぎりなき大きな「めぐみの力」である。この經驗を超えた「めぐみの力」を、我々は「佛のめぐみ」といたゞくのである。佛の暖い慈悲の懷に生かされてゐる喜びである。そこに他力の世界への轉入が行はれ、佛の本願力が實感となつて味はされるのである。

自力の世界に於ては三惡道に墮すべき身を、本願他力の誓ひにまかせて、佛名を唱する時、罪も惡も大悲に包まれて、はじめて光明はかゞやくのである。他力の世界に於ては、身口意の三業は、すでに輪廻の業因でなくして、念佛に統一された生活意欲として力強くはたらくのである。「善人は善人ながら念佛し、惡人は惡人ながら念佛して、たゞむまれつきのまゝにて念佛」する時、「本願のてびろく不思議なる道理」があらはれるからである。

それゆゑに念佛を大善根であるといふのである。かくして我々が平等に一切に廻向すべき善根は、念佛の一行である。

次に「同じく菩提心をおこして」とあるのは、我れ人ともに同じく往生を願ふ心をおこすことである。

ところが、もともと菩提心とは願作佛心である。菩提は「さとり」であり、「さとり」を得た人が佛である。「佛のさとり」を得やうといふ心をおこすのが發菩提心である。これは佛道に志すかぎり、當然

のことである。成佛こそ究極の目的だからである。しかるに前に述べた如く、けがれに満ちた娑婆に生きて日々に惡業を重ね、罪を犯してゐるのが現實である。そこに他力本願の道が開かれたのである。そこで法然上人は、念佛を正行とし、菩提心などを助業の中に數へられたのみならず、專修念佛の立場からは、菩提心さへも無用であるといはれたのである。これは求道の心を輕んぜられたのではなく、念佛の一行の中に菩提心が自からそなはると確信されたからである。

三祖良忠上人は、このことを菩提心には聖道門の菩提心と淨土門の菩提心の別があると説明された。此の土で菩提心をおこし、此の土で菩薩道を修行するのが聖道自力の菩提心であり、此の土で菩提心をおこし、往生の後、彼の淨土で菩薩道を修業するのが淨土他力の菩提心であるといふのである。この意味からいへば、聖道の菩提心は願作佛心であるのに對し、淨土の菩提心は願往生心であるといふことになる。往生を願ふ心は、念佛する者の當然の心がまへであ

四 弘 誓 願

衆生無邊誓願度 煩惱無邊誓願斷
法門無盡誓願知 無上菩提誓願證
自他法界同利益 俱生極樂成佛道

(衆生は無邊なれども、誓つて度せんことを願す。煩惱は無邊なれども、誓つて斷ぜんことを願す。法門は無盡なれども、誓つて知らんことを願す。無上菩提をも誓つて證せんことを願す。自他法界同じく利益し、俱に極樂に生じて佛道を成ぜん)

る。良忠上人が、念佛者の心がまへとしての安心に、總安心と別安心とを分け、「まごころ」と「深く信ずる心」と「廻向して往生を願ふ心」との三心を別安心といひ、菩提心を總安心と名づけられたのは、こんなわけである。しかしながら、淨土の菩提心は、三心の中の「廻向して往生を願ふ心」と別なものでもなく、念佛の一行におのづからそなはつてゐることに變りはない。

かくして「同じく菩提心をおこして、安樂國に往生せん」の二句は、我れ人ともに同じく往生を願ひ、ともどもに念佛の一行に進まうとする志を表はすものであることがうかゞはれるのである。そこで次に十念を唱へるのである。

以上、總廻向文について述べて來たが、こゝで言ひ添へて置きたいことは、廻向は決して理論や説明そのものではないといふことである。朝に晩に、香をたき、四季をりをりの花をさゝげ、何はなくとも佛飯と茶菓を供へて、つゝましく、すなほに、合掌念佛する無心な「おさな兒」の心こそ、廻向する心であるといふことである。

度・斷・知・證の四つについて、弘く誓はれた本願であるから、四弘誓願といふのである。

前の菩提心の所で述べたやうに、菩薩——大乘教徒は佛となるために、菩提心をおこして菩薩行を修する。その菩薩行を一口にいふと上求菩提下化衆生である。菩薩は誓ひを立て、上は菩提のために煩惱を斷じ(斷)、正智を得(知)、下は衆生を濟度し(度)、かくして佛果を證する(證)のである。これを佛の方からいふと、もろもろの佛は、いづれも、かつて菩薩であつた時、この誓願をおこし、證りを得て遂に佛となられたのである。「昔しの願ひ」かつての誓ひ」であるから本願といふ。

この本願には總願と別願があるとされる。度斷知證の四弘誓願は諸佛共通の本願であるから總願といふ。しかるに諸佛やその住せられる國土には、それぞれ異つた莊嚴や功德がある。それは、その佛が菩薩であつた時、それぞれに立てられた誓願によつて、成就されたものであるからである。これを別願といつてゐる。阿彌陀佛の四十八願とか、釋迦の五百の大願とか、普賢の十大願など、いはれるものである。

四弘誓願は、つまり諸佛共通の本願であり、佛道修行の通軌ともいふべきものであるから、色々な經典や論書にこの意味のことが説かれてゐる。そこで各宗に於て用ひられてゐるのであるが、その文字には異同がある。今淨土宗で用ひてゐるのは、惠心僧都の往生要集に出てゐる偈文であつて、度斷知證の四句に僧都が「自他法界」以下の二句を加へられたものである。

第一句の衆生といふ語は「共に生存するもの」とか「しばしば生死に流轉するもの」といふ意味である。人間をはじめ、迷ひの心をもつて苦しみの世界に流轉するすべてのものゝことである。その數は限りなく多いが、菩薩はこれをことごとく濟度しやうと誓願するのである。「度」は迷ひの此岸から、さとの彼岸へ渡らしめることである。そして佛には智德と斷德と恩德の三德があるとされてゐるが、その中の恩德は、衆生濟度の菩薩によつて成就されるのである。溫い慈恩の行である。

第二句は、衆生を濟度するには、自ら煩惱を斷滅しなければならぬ。又衆生をして煩惱を斷除せしめなければならぬ。その煩惱も限りがない。「一人一日中、八億四千の念あり、念々の中の所作皆是れ三途の業なり」と登山狀に示されてゐるが、出る息、引く息、瞬間々々の心の動き、すべて地獄餓鬼畜生へのはたらきである。これら自他の煩惱をすべて斷滅し、誓つて佛の斷德を得やうと願ふのである。

第三句は、衆生が無邊であり、煩惱の無邊であるのに應じて、佛の法門もまた盡くることがない。いはゆる八萬四千の法門である。菩薩はこれらの教法をことごとく知りつくし、誓つて佛の智德を得やうと願ふのである。

かくの如く法門を知りつくし、煩惱を斷除し、衆生を濟度し、誓つて無上の菩提をさとらうと願ふのが第四句である。

しかも前に述べたやうに、我らは愚痴無知の凡夫である。法然上人の法語に

「凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし。たとふるに猿のごとし。まことに散亂してうごきやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なによりてかをこらんや。もし無漏の智劍なくば、いかでか惡業煩惱のきづなを斷たむや。惡業煩惱の絆を斷せずば、何ぞ生死繫縛の身を解脫することを得んや。かなしきかな、かなしきかな、いかゞせんいかゞせん」(聖光房に示されける御詞)

とある。四弘誓願はまことに佛道修行の通規であり、成佛への道であるけれども、上人も歎かれたやうに、我ら凡夫には如何とも仕方のない聖者の道である。

けれども阿彌陀佛は、かつて法藏菩薩と稱せられた時、我らに代つて此の道を修行し、凡夫のために四十八の別願を立て、往生淨土の道を示されたのである。我らの取るべき道は往生極樂である。我れ人ともに往生し、菩薩道を修行して、然る後に法界の衆生を利益せねばならぬ。「自他法界同じく利益し、とも極樂に生れて佛道を成ぜん」とあるのは、この心を佛に誓ふ意味である。法然上人が「廻向發願心といふは、往生して衆生を利益せんと思ふ心なり」といはれたが、念佛一すぢに廻向して往生を願ふのは、やがて佛の大悲本願を心として、一切衆生を利益せんがためであることを知るのである。



ヒカリ佛の堂

五月雨のふりのこしてや光堂

光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。と、芭蕉が「奥の細道」で記している中尊寺金色堂は、最近この三代の棺を現代科學の光の前にひらいて調査されたことから、世上の注目をひいた。この金色堂は、阿彌陀三尊の佛を安置したアミダ堂で、當時の信仰をよく物語っているが、珠の扉、金の柱という言葉のように金色まばゆい莊嚴で飾られていたことから金色堂の名があり、従つて「光堂」と呼ばれた、と普通には考えられている。

しかし、光堂という名は、光り輝く堂の莊嚴さを指した意味よりも、もつと本質的な意味から來ている。即ちアミダ佛は、無量光の佛であり、その佛德は「光明遍照十方世界」の言葉そのまゝに、すべてを惠み照らす廣大無邊の慈悲である。平安時代の人たちは、この佛光を仰ぎ、佛光に照らされる想ひの中に生きた。従つてアミダ佛を人々は親しきをもつて「ヒカリ佛」と呼んでいた。ヒカリ佛を安置する堂それはたとえ外觀はさゝやかでも、佛光にみちみちた「光堂」と呼んだのである。こゝに、千年前の信仰厚き人たちの、ひとつの言葉がもつ眞意を感じたい。(藤田寛雅)

◇新入會申込の方々に◇

法然上人鑽仰會は、申込によつて何時からでも、誰でも入會し、月刊信仰雜誌「淨土」の配布をうけることができます。

◇本會は、淨土宗祖法然上人が示された念佛信仰をいまの生活の中にふかめてゆくとともに、更にひろく社會に正しい信仰をたかめてゆくために結ばれたものです。

◇會の目的をたゆまず達してゆくために、毎月「淨土」を刊行し、會員に配布し既に十六年に及んでいます。世間の出版界が流轉の姿を辿つてゐる戰時、戰後を通じて、「淨土」はつねに着實に歩んできております。淨土の歩みはとりもなおさず、正しい信仰に生き抜いてゆく會友の方々の歩みに他なりません。

◇その他、本會では眞に心の伴侶となる圖書の刊行頒布、講演會、座談會などの事業を行うとともに、多くの人々と廣く手を携えてゆく上から、會員の申込によつて講師の紹介派遣もいたします。

◇會員となるには、半年一三八圓または一年二七六圓を添えて申込まれる他には別に手續を必要といたしません。申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

◇會員は淨土に投稿することができます。但し採否は編集部にお任せ願います。

芝園だより

◇油と火、誰でも危いことを知りきつてゐる。この當りまえのことが注意されないで、熱海が火の海になり、バスが火の車になつて、人命を失い、社會に大きな損失をもたらず。學校、役所などの公共建築物の火事の多いのも、戰後にきわだつ事の一つである。

◇決局は公共的な心が缺けていることに歸する。日本人の生活には國家とか、家庭とかの考えは強いが、隣人、社會の觀念がうすい、とは今までもよく言われて來た。國家觀念、家族制度、そうしたものを根本から一度つきくづしたときに、人は自己に對する考えだけになつてしまつて、當然新しくそこにたててゆくべき、隣人愛、社會道德といった面を依然として忘れてゐる。これが戰後の世の中をいつまでたつても混亂から救い出せない大きな缺點の一つである。

◇コムが淨土であることは、一人一人の心が、利地に、廻向の心にまづ目ざめてゆくことより他にはない。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。れば、着次第御送本申上げます。

「淨土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年四月二十五日印刷
昭和廿五年五月五日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノハ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番

會員番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

學生補欠募集 各學年 若干名

文學部(哲學・史學・文學科)

佛教學部(佛教學・梵文學・宗學)

旧制中學卒業者には資格認定の道あり

各科補欠若干募集中

大正大學

大正大學高等學校(夜間)

普通科・宗教科各學年補欠募集中

入學案内は二〇圓及び封筒(切手貼布)を添えて申込の宛名記入のこと

東京都豊島區西巢鴨四丁目

都電・バス西巢鴨下車

淨土トラクト續刊豫告

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——淨土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられ、續刊の要望が多いので、次のような企劃で順次に新刊いたします何卒御期待下さい。

お十夜の話

藤田寛雅著

四圓送六圓
既刊賣切

お彼岸の話

竹中信常著

五圓送六圓

お念佛の話

佐藤賢順著

近刊

お盆とおせがき

近刊

先祖とお墓の話

近刊

その他、續刊企劃中

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會